



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

心を磨く

いま 今から116年前、ねんまえ すぎやまたつこせんせい 杉山辰子先生が法音寺の前身である
「仏教感化救済会」を創設されました。その後、法音寺と
なるまでに何度も名称が変わっています。「仏教修養団」
「仏教感化修養団」「仏教澍徳修養団」「大乘修養団」と、
いずれの名称にも「修養」の文字が含まれていました。修
養とは、日々努力を重ねて人格を練り上げ、高めていくこ
とを意味します。先師は修養をとっても重んじておられたの
です。

さいきん 最近ではあまり「修養」という言葉が使われなくなりました。
かたくる 堅苦しいものと思われるのかもしれませんが。し
かし、私は人格を陶冶するために修養は非常に重要である



とおも
と思えます。

《日常こそ修養の場》

中国・明の時代、今から約500年前、陽明学を大成した王陽明は、「事上磨錬」という教えを説きました。事上磨錬とは「人はすべからく事上に在って磨錬し、工夫を做すべし」ということで、この「磨錬し、工夫を做す」というのが修養するということです。「事上に在って」とは、「実際の事柄に即して」ということです。つまり、毎日の仕事はもちろん、挨拶や食事、掃除といった日常生活のすべての行いを修養と思って、心を込めて誠実に実践するということです。それによって気づきが深まり、人格が高められるということです。



《イチローさんの名言に学ぶ》

以前、毎日新聞に福岡ソフトバンクホークスの監督・小久保裕紀さんの文章が掲載されていました。小久保さんはイチローさんとの忘れられないエピソードがあると書いておられました。

小久保さんはプロ二年目で本塁打王を獲得しましたが、翌シーズンは慢心があったのか、成績が大きく落ち込みました。一方のイチローさんは三年連続の首位打者に驚進中という時のことです。

「その年のオールスターゲーム、二人で外野をランニングしながら、彼に聞いた。

『モチベーションが下がったことはないの？』

するとイチローは私を見つめながら、『小久保さんは数



字を残すために野球をやっているんですか?』と言った。

『僕は心の中に磨き上げたい石があります。それを野球を通じて輝かせたいのです』

自分はなんと恥ずかしい質問をしたのかと、顔が赤くなつた。彼の一言で、野球を通じて人間力を磨く、というキーワードを得た」

ちなみに、イチローさんはその後七年連続で首位打者となり、これは現在も破られていない日本記録です。アメリカ大リーグに渡った初年度にも首位打者となり、実質的に八年連続の快挙です。

また2004年には大リーグのシーズン最多安打記録を84年ぶりに更新し、この記録は現在も破られていません。通算4367安打のギネス記録を持つイチローさんは、今年



日本人で初めて大リーグの殿堂入りを果たしました。記者投票の得票率は99・7パーセントでした。満票には一票足りませんでした。イチローさんはその時、「一票足りないのはすごく良かった。完璧を追い求めて進んでいくのが人生。不完全であることが良いのです」と語ったそうです。求道者イチローさんの面目躍如たると思います。

《自助論との出会いと日本の修養時代》

日本は明治から大正にかけて、言うなれば「修養の時代」でした。明治維新によって士農工商という身分制度が廃止され、どのような身分の人でも努力すれば立身出世ができるようになりました。つまり、修養と努力によって道が開かれる時代になったのです。



明治維新の少し前、江戸幕府最後の将軍・徳川慶喜の命により、中村正直という人物がイギリスへ渡航しました。彼は、12人の旗本の優秀な若者達の留学を監督するという立場で派遣されたのです。中村正直は、昌平黉という、現代で言えば東京大学のような幕府の学校の開学以来の秀才でした。

当時のイギリスは「大英帝国」として七つの海を支配する世界最強の国でした。しかしよく見れば、日本と同じような小さな島国です。中村正直は、なぜこの小さな国が世界を制するほどの大帝国になれたのかと疑問を抱き、人に話を聞き、さまざまな資料にあたりましたが、答えは得られませんでした。

そして中村正直が帰国することになった時、イギリスで



親したしくなった人物じんぶつが当時とうじ、イギリスでベストセラーになった『セルフ・ヘルプ』という本ほんを饒別せんべつにくれました。

この本ほんは日本語にほんごで『自助論』と訳やくされます。帰国きこくの船旅ふなたびの中でこの本ほんを読よんだ中村正直なかむらまसानおは、これがイギリス繁栄はんえいの理由りゆうだぐと確信かくしんしました。

『セルフ・ヘルプ』とは、「天てんは自ら助たすくる者ものを助たすく」、すなわち「自助努力じじよどりよくし、修養しゅうようをする者ものこそが天てんに助たすけられる」ということです。この本ほんには独立独行どくりつどっこうの精神せいしんを思想的根幹こんかんとした、欧米史おうべいし上有名しじょうゆうめいな三百余人ひゃくよにんの成功立志談せいこうりっしだんが載のっています。中村正直なかむらまसानおは、イギリスには自助努力じじよどりよくの精神せいしんを持もつ人ひとが多く、その結果けっかとして国くにが繁栄はんえいしたぐと考えたのです。中村正直なかむらまसानおは、日本にほんに帰国きこく後ご、すでに幕府ばくふはなくなっていました。徳川慶喜とくがわよしのぶのいる静岡しずおかに赴おもむいて、帰国きこくの報告ほうこくをし、



そこで『セルフ・ヘルプ』を翻訳し、『西国立志編』と題して出版しました。『セルフ・ヘルプ』の自助努力の精神は、近代国家と資本主義の形成期にあつて、新しい日本と自分の前途に不安を抱いていた多くの青年達に希望の光明を与えました。この本は福沢諭吉の『学問のすすめ』とともに明治の二大啓蒙書です。大正時代の思想家・吉野作造は「福沢諭吉は明治の青年に、日本人の『智』の世界を開いた。また『徳』の世界を開いたのは中村正直である」と言っています。

《心学に見る修養思想》

実は日本にはもともと、修養を重んじる伝統的な思想が存在していました。それは「心学」です。江戸時代の中期、



徳川吉宗の時代から広まったとされています。

心学は、神道・儒教・仏教のそれぞれのエッセンスを取り入れ、わかりやすく実践的な教えにまとめた学問です。心学では「人間には心がある。心は玉のようなものだ。玉であれば、これを磨いて立派にすればいいはずだ」という考えから、「玉を磨くには磨き砂が必要である。その磨き砂は神道でもいいし仏教、儒教でもいい。また三つ合わせたものでもいい」としています。しかも心学は、高いところから一方的に教えるのではなく、聞く人と同じ目線まで下りてきて「良かったら聞いていきなさい」という姿勢で伝えます。

心学の歌に「分け登る 麓の道は多けれど 同じ高嶺の月を見るかな」とあります。山に登る麓の道は多いけれど



ど、登^{のぼ}ってみれば峰^{みね}から見^みえる月^{つき}は同^{おな}じだ^ミという意^い味^みで
すが、これが心^{しん}学^{がく}の思^し想^{そう}です。

心^{しん}学^{がく}で最^もも有^{ゆう}名^{めい}な人^{じん}物^{ぶつ}が石^{いし}田^だ梅^{ばい}岩^{がん}です。彼^{かれ}の教^{おし}えは「石^{せき}
門^{もん}心^{しん}学^{がく}」と呼^よばれ、現^{げん}代^{だい}でも多^{おほ}くの人^{ひと}に読^よまれています。

石^{いし}田^だ梅^{ばい}岩^{がん}の『心^{しん}学^{がく}全^{ぜん}集^{しゅう}』の中^{なか}に、次^{つぎ}のよう^{よう}な問^{もん}答^{とう}がありま^す。
ある日^ひ、ひとりの弟^{でし}子^こが梅^{ばい}岩^{がん}に尋^{たず}ねまし^た。

「忍^{にん}とい^いうこ^この極^{きよく}致^ちとは、ど^どうい^いうも^もの^のでし^しょう^{よう}か」
する^と梅^{ばい}岩^{がん}は答^{こた}えまし^た。

「忍^{にん}は、忍^{にん}な^なき^きに^に至^{いた}つて^てよ^よし^しと^とす」

つま^り、我^が慢^{まん}し^しょう^{よう}と^とか、忍^{にん}耐^{たい}し^しょう^{よう}とい^いつ^つた意^い
識^{しき}が^がな^なく^くな^なつ^つた状^{じょう}態^{たい}が、堪^{かん}忍^{にん}の理^り想^{そう}で^であ^ある^るとい^いう^うの^ので^です。
至^し極^{ごく}あ^あた^たり^りま^まえ^えに無^む意^い識^{しき}の^の内^{うち}に堪^{かん}忍^{にん}で^でき^きる^るの^のが最^{さい}高^{こう}の^の境^{きやう}地^ち
と^とさ^され^れる^るの^ので^です。非^ひ常^{じょう}に^にお^おず^ずか^かしい^い境^{きやう}地^ちで^です^が、心^{しん}学^{がく}で^では



ここに^{いた}至るために「^{かん}堪忍」についての^{おし}教えが^{ひじょう}非常に^{おお}多く^み見られます。

ここで^{しん}心学の^{かん}堪忍の話を一つ^{しょう}紹介します。

^{えど}江戸時代後期、^{てん}天保年間の頃のことです。^{ふくい}福井藩の^{うま}馬廻

^{やく}り役をつとめていた^み三好泰輔に、^{まつ}松之助という^{むすこ}息子がいま

した。^{まつ}松之助の^{あね}姉は^{じゅう}重要な^{ちい}地位にある人と^{ひと}結婚して^{けっ}いたの

で、^{かれ}彼は^{どう}同輩の^うねたみを^{えん}受けることになりましたが、^こ縁故

を利用して^り立身出世^{りっしんしゅっせ}することを^{きろ}嫌っていた^{まつ}松之助は、^{すけ}なに

ごとも^{ひか}控えめに、また^{けん}謙虚な^{たい}態度を^{まも}守っていました。

ある日、^ひ藩の^{はん}有力者の^い家を^{おとず}訪れ、その^{かえ}帰りを^ま待っていた

時の^{とき}ことです。^{りん}隣室に^{はん}藩中の^{わか}若侍が^い五、^{にん}六人^{あつ}集まり、^{まつ}松之

助の^{すけ}噂^{うわさ}をしています。



「女のお陰にすぎなければ、武士として出世できない男
ほど、恥ずかしいことはないな」

こんな言葉が笑いとともに聞こえてきます。松之助は力
ツとして、太刀の鯉口を切り、庭に出て隣の部屋に躍り込
もうとしました。その途端、彼の足が庭の敷石近くに生え
ていた『おじぎ草』に触れました。すると、おじぎ草は見
る間に頭をたれ、しぼんでいきました。松之助は、

「ああ、この小さな草にさえこの忍耐がある。人間である
自分が、このぐらいのことで怒ってどうする。がまんしよ
う」と思い、そのまま怒りを静めて自分の家へ帰っていき
ました。後年、松之助は藩の中でも異例の出世をしました
が、彼の刀の柄袋には「おじぎ草」の絵が描かれ、いつも
彼はそれを心の戒めとしていたということです。



《ユーモアで伝える心学》

心学しんがくの先生せんせい達は人ひとを集めては教えおしを説といていました。ひ
とりの心学しんがくの先生せんせいが、ある村むらで話はなをした時ときのことです。

「皆さん、堪忍かんにんをしましょう。『堪忍かんにん』というこの二文字もじ
を守まもれば、人生じんせいは安泰あんたいです」と言いうと、漢字かんじの読よめないお
じいさんが「先生せんせい、『かんにん』は四文字もじじゃないですか
？」と尋たずねました。

先生せんせいは「いやいや、堪忍かんにんは二文字もじです」と返かえしましたが、
おじいさんは「どう数かずえても四文字もじじゃ」と譲ゆずりません。
ついに言いい合あいになっなってしまいい、ついに先生せんせいが堪忍かんにんを破やぶっ
て「馬鹿者ばかもの！堪忍かんにんは二文字もじだ！」と怒鳴どなってしまいいました。
するとそのおじいさんが言いいました。「やっぱり堪忍かんにんは四
文字もじだな。わしは、四文字もじの堪忍かんにんを守まもつとるから怒おこりま



せんよ」と——これは心学しんがくの先生せんせいが一本取ぼんとられたというユニークな話はなしです。

落語らくごの中なかにも、心学しんがくの先生せんせいが登場とうじょうする演目えんもくがあります。

その一つが『天災てんさい』という噺はなしです。

主人公しゅじんこうは、とても喧嘩けんかっ早い八五郎はちごろうという男おとこです。ある

日ひ、八五郎はちごろうが近所きんじよのご隠居いんきよのもとを訪ねたず、「離縁状りえんじょうを二通つう

書いてほしい」と頼みたのみます。ご隠居いんきよが事情じじようを尋ねたずると、

「かかあがあまりにも頭あたまにくるんで張はっ倒たおしてやった。も

う離縁りえんする」と八五郎はちごろうは言いいます。ご隠居いんきよが「では離縁状りえんじょう

のもう一通つうは誰だれに渡わたすんだい？」と聞きくと、「それはババ

アにくれてやるんだ」と答こたえました。ババアとは八五郎はちごろうの

母親ははおやのことです。



「かかあを張^はつ倒^{たお}したら、ババアが仲裁^{ちゆうさい}に入^{はい}って、かかあ
の肩^{かた}を持^もちやがった。だから今度はババアを蹴^け飛ば^としてや
ったんだ」

これはいかんと思^{おも}ったご隠居^{いんきょ}は、「まあ、離縁^{りえん}状^{じょう}は書^か
てやってもよいが、その前^{まえ}にちよつと手紙^{てがみ}を書^かいてやる。
この手紙^{てがみ}を持^もって、近所^{きんじょ}に住^すんでいる心学^{しんがく}の先生^{せんせい}のところ
に行^いって、話^{はなし}を聞^きいておいで」と言^いいます。

八五郎^{はちごろう}がその手紙^{てがみ}を持^もって心学^{しんがく}の先生^{せんせい}のもとを訪^{わづ}れると、
先生^{せんせい}は、なるほど、これは気性^{きしょう}の荒^{あら}い男^{おとこ}を諭^{さと}してくれとい
う頼^{たの}みだなと理^り解^{かい}し、教^{おし}えを説^とき始^{はじ}めます。

「短気^{たんき}は損気^{そんき}」「ならぬ堪忍^{かんにん}するが堪忍^{かんにん}」「堪忍^{かんにん}の袋^{ふろ}を首^{くび}
にかけ、破^{やぶ}れたら縫^ぬえ、破^{やぶ}れたら縫^ぬえ」「氣^きに入^いらぬ風^{かぜ}も
あろうに柳^{やなぎ}かな」などと話^{はな}しますが、八五郎^{はちごろう}はまったく聞^き



く耳^{みみ}を持ちません。

そこで最後^{さいご}に心学^{しんがく}の先生^{せんせい}はこう言^いいました。

「何事^{なにこと}も天災^{てんさい}〴〵と思^{おも}ってあきらめよ。急^{きゆう}に雨^{あめ}が降^ふってき

ても、天^{てん}と喧嘩^{けんか}はしないだろう。人^{ひと}に嫌^{いや}なことをされたと

しても、天災^{てんさい}と思^{おも}えばいいんだ。道^{みち}を歩^{ある}いていて小僧^{こぞう}が打^う

ち水^{みず}をして、その水^{みず}がかかったとしても、天^{てん}が水^{みず}をかけ

たのだ〴〵と思^{おも}えば腹^{はら}も立^たたない。路地^{ろじ}を歩^{ある}いていて瓦^{かわら}が落^お

ちてきても、〴〵これは天^{てん}が瓦^{かわら}を落^おとしたのだ〴〵と思^{おも}えば怒^{いか}

りようがない」

それを聞^きいた八五郎^{はちごろう}は、「確^{たし}かにそうだな。天災^{てんさい}だと思^{おも}

えば腹^{はら}も立^たたない。ありがとうよ」と言^いって帰^{かえ}っていきました。

心学^{しんがく}の先生^{せんせい}が「茶^{ちや}も出^ださず、お構^{かま}いもせず申^{もう}し訳^{わけ}なかつ

たな」と声^{こえ}をかけると、八五郎^{はちごろう}は「何^{なに}、天^{てん}が茶^{ちや}を入^いれな



ったんだ。天災とあきらめれば、なんでもねえや」と言い残して帰っていききました。先生は「少しは進歩したか」と苦笑しながら、八五郎を見送りました。

八五郎の長屋の隣には熊五郎という男が住んでいました。熊五郎は現在、女房と別れており、別の女性と暮らしていましたが、その日、たまたま別れた女房が家に来て、騒動になっていました。

そこに八五郎が帰ってきました。これはいい機会だ。先生に聞いた話を熊さんに教えてやろうと思うのですが、うる覚えのため話が伝わりません。

「短気は損気」を「たぬきはたぬき」、「ならぬ堪忍するが堪忍」を「奈良の神主、駿河の神主」、「堪忍の袋を首にかけ、破れたら縫え、破れたら縫え」は「神主の頭陀袋、



破れたら縫え、破れたら縫え」、「氣に入らぬ風もあろうに柳かな」は「氣に入らぬ風もあろうにウナギかな」などと、意味不明なことを言っています。

熊五郎が「結局、何が言いてえんだ」と言うと、八五郎はこう締めくくります。

「いやいや、どんなに女房が怒鳴り込んでこようともな、天が怒鳴り込んできたと思えばいいんだ。天災だと思えばいいんだよ」

これに対して熊五郎が言った一言が落ちとなります。

「家に来たのは先妻だ」

このように、修養は時代や宗教を超えて、人間がより良く生きるための根幹にある考え方であると思います。

